

藝園牧草



酪農の適地化は進む

岩手県の高地帯を救つたクロバーカー栽培

松丸志摩三



ヒエが常食——いまだに原始的農業

岩手県北部の岩手郡の一部から、九戸郡、下閉伊郡にかけての地域は、俗に岩手県のチベット地帯とよばれている。その様子は事情をよく知らない人には、このせまい日本にこんなに広い未開拓の地域がまだよくも残っていたものだと感心させられるにちがいない。そのことはこの地方の農民の常食がいまだにヒエだといふ一事をもつてしてもわかるように、ヒエしか作れない——といきつて丁うには少しく過言だが——青烈な気候の故である。

なにしる三年に一度は収穫皆無にも等しい状態におちいるのが常という常習的灾害地帯のことである。加うるに農民は未だにミグハを使つてゐるといつたような、原

始的農業技術をもつて營農している。そのため栽培作物も冷害に対し耐寒性の最も強いヒエを作ることになつて了つてゐるのも、当然のことといえば当然の話である。

いや、そういうことだけでは農民はまだ安心ならないでいる。たとえば私がちよつと調べたところでは、この地方の農民は、一戸の家で十九種類にもおぶ種々雑多の作物を栽培しているのが普通である。それも要するに冷害にそなえて、危険分散をねらつてのこととなるのである。

しかしそうちしたことがこの地方の農民の農業技術の発展をますますはばむ極めて大きな条件になつてゐることはいうまでもない。くわしくいえばそのヒエ作りといふのが反当せいやいとれた時で二一・五石精白にして七八斗程度、金額にして七、

というのではなかつた。

日本の農民の御他聞にもれず、実取り農業

が普通である。このことがつい先頃まで残つていた、この地方に特有な地主による苛酷な搾取の慣行とあいまつて、この地方の農民をして貧乏のドン底生活に追込んで来た最大の原因になつていた。

冷害とたたかう

だからといって、この地方の農民が、気候の苛烈さにまけて、手をこまねいてそのまま原始段階の農業技術と、動物的といつてい貧乏のドン底生活とに甘んじてきていたのだと考えたら、それは間違いである、といふわけは相当古くから、たとえば短角牛

の飼育や乳牛の飼養を行つてきていたことなど、すべてこの地方の農民が苛酷な気候に何とかして自分の力で打勝とうと試みていたその努力の現れである。

だが、そういう努力が、はたしてどれだけの効果をもたらしていたかといえば、これまでのところは、その成果はたいしたものではなかつた。

耐寒性の強いクロバーカー栽培

を主義と考え、そういう畜産の仕事は副業と思う考え方を抜けきれずにいたからである。だから一度冷害を受け、実取作物が減產し、飼料に廻せる部分の収穫が——といつてそれは飼料とはいえないような、ヒエガラ、ソバガラ、ムギガラといつたようなものが主体なのだが、減るとたちまちにして副業の畜産も根底からゆすぶられてしまつり、それが普通だつたからである。

はこの地方の農民なりに、この地方の苛烈な気候に打勝とうとしてあれこれの方法を考え、講じてはいたものの、これまでのところはどうにも打勝つことができず

にいて、それをいわば自分たちが免かれることのできない宿命のように考へがちでいたのも、またやむをえないことである。

しかし、その反面に、ごく最近になつて、この地方にも漸く科学の恩恵が浸透しはじめてきた、例えはその第一は、バスによる交通網が発達して來たことであり、第二は電燈がともり、ラジオが普及したことである。だが、それらのこととに比べ恩恵の浸透は遅れてゐるとはいゝ、それでいてこの地方の農民に何よりも大きく、いわば本質的な恩恵を与えたものは、最近になつてこの地方に普及してきた飼料作物としてのクロバーカー栽培であつたといべきである。

方が酸性土壌地の多い日本ではまれに見る
石灰岩地帯なのである。それだけにこの地
方にはクロバー栽培が好適しているのであ
つて、この地方にとつてクロバー栽培は真
に適地適作といへよう。

しかもそればかりではない、即ち、これ
迄あらゆる作物の中で、いちばん冷害に耐え
ると考へられ、それだけにこの地方の農家
の経営安定上なくてはならない作物とされ
ていたヒエにくらべて、クロバーは遙かに
冷害に強いことがわかつて来た、つまりこ
の点でもクロバーはこの地方に好適した作
物なのである。

こうしてこの地方にごく最近になつて新
しくクロバー栽培が急速に普及して、そこ
に基盤をおいた眞の意味での酪農といえる
経営形態が、このごろこの地方にようやく
確固たる地位を確こうとして、はじめてこ
の地方の農家経営も漸く安定の緒につこう
としあげ始めたのである。

いつた肥培管理はせずに、強いていえばクロバーを刈取つた都度、牛の尿を撒布する程度のことしかしていない。

しかもそれでいて初年度で、一、八〇〇～二、〇〇〇貫程度、次年度以降は二、五〇〇～二、八〇〇貫位のものを収穫しているのが普通である。ということは、成分計算で換算してみると、反当大体フスマ三四〇貫のものがもつ蛋白質が得られるということである。そしてそれをまた別のいい方でいえば、反当収入がほぼ三四、〇〇〇になるということでもある。だからヒエ、ムギ、ダイズの二年三作による本来の営農方法による収入が、反当二〇、〇〇〇円にもなれば“御の字”であるにくらべて、いちじるしい収入の増加といわなければならず、それがまたいと楽な仕事の結果だという点に格別大きな意義がある。

易に理解し得ないことなのである。

そして第二には……こうしてクロバーを栽培し、それを飼料に使い、本格的な酪農経営を富むようになつて、この地方の農民もはじめてこれまでの原始的な、自給自足の経営経済をぬけて、商品生産的経営を営むことができるようになるのだということ。つまりそこにはじめて経営の、そして生活の更には思考の近代化の道が拓けてくるのだといふことである。しかもそういう裏づけがあつてこそ、現在十九種類もの、雑多な作物を作つてゐる否作らざるを得ないでいるものが、栽培作物を単純化することもでき、はじめて農業技術の発展も期待できる。

つまりそういう理由から、私は僅か一年有半という期間ではあつたが、この地帯の半町村で酪農指導に挺身し、クロバーや栽培を中心にして、それに馬鈴薯、デントコーン、ライ麦、並にカブの栽培をとりいれた新しい輪作様式をうちたて、その上に確固たる酪農を確立しようとしたのである。

私の考えたこの新しい輪作様式は、間違が

◆表紙写真……牧草の刈
◆岩手県の高冷地帯を救
◆酪農十年の歩み……
◆養豚における草の利用
◆我が國の酪農情勢……
◆新しく果樹を植えた人
◆りんごの早生種並びに
◆北海早生と千両梨の由
◆ホウレン草の栽培試験
◆農芸談話室……

2・4

牧草と園芸

ルーサン

牧草と園芸 十月号 目次

- | | | |
|--------------------------|---------|-------------|
| ◆表紙写真 | ◆牧草の刈取 | (チモシー、赤クロバ、 |
| ◆岩手県の高冷地帯を救つたクロバ栽培 | 松丸志摩 | 三二 |
| ◆酪農十年の歩み | 郷正光 | 三四 |
| ◆養豚における草の利用 | J.H.ゼラ | 一八 |
| ◆我国の酪農情勢 | 沢潤 | 一八 |
| ◆新しく果樹を植えた人たちのために | 佐藤敬雄 | 三四 |
| ◆りんごの早生種並びに核果類に対する
影響 | 沢田英吉 | 三四 |
| ◆北海早生と千両梨の由来について | 星野勇三博士談 | 五六 |
| ◆ホウレン草の栽培試験成績 | 武川政江 | 六六 |
| ◆農芸談話室 | | |
| 2・4・5・T・Pの影響 | | |

のつらさを体験したことのない人達には容易に理解し得ないのである。

そして第二には……こうしてクロバーを栽培し、それを飼料に使い、本格的な酪農経営を営むようになつて、この地方の農民もはじめてこれまでの原始的な自給自足の経営経済をぬけて、商品生産的経営を営むことができるようになるのだということ。つまりそこにはじめて経営の、そして生活の更には思考の近代化の道が拓けてくるのだといふことである。しかもそういう裏づけがあつてこそ、現在十九種類もの、雑多な作物を作つてゐる否ならざるを得ないが、栽培作物を単純化することもできて、はじめて農業技術の発展も期待できる。

つまりそういう理由から、私は僅か一年有半という期間ではあつたが、この地帯の一町村で酪農指導に挺身し、クロバー栽培を中心にして、それに馬鈴薯、デントコーン、ライ麦、並にカブの栽培をとりいれた新しい輪作様式をうちたて、その上に確固たる酪農を確立しようとしたのである。

◆表紙写真……牧草の刈取（チモシー、赤クロバー、ルーサン、ブローモグラスの混播、二年目）

◆岩手県の高冷地帯を救つたクロバー栽培……松丸志摩三・二〇酪農十年の歩み……正光四・四〇養豚における草の利用……J・H・ゼラ一・六〇我國の酪農情勢……沢潤一・八〇新しく果樹を植えた人たちのために……佐藤敬雄三・三〇りんごの早生種並びに核果類に対する2・4・5・T・Pの影響……沢田英吉・西

◆北海早生と千両梨の由来について……星野勇三博士談五・五〇ホウレン草の栽培試験成績……武川政江・六

◆農芸談話室……

農地帯を建設し得る見込みが十分にあるのだと、ということだけは知つていただけたことと思うが、実は私はそれが将来に対するいわゆる架空の期待なのではないに、すでに着々と歩をすすめつある現実の期待なのだということを、くれぐれも強調したく思ふものである。

易に理解し得ないことなのである。

そして第二には、こうしてクロバーを栽培し、それを飼料に使い、本格的な酪農経営を営むようになって、この地方の農民もはじめてこれまでの原始的な、自給自足の経営経済をぬけでて、商品生産的経営を営むことができるようになるのだといふと。つまりそこにはじめて経営の、そして生活の更には思考の近代化の道が拓けてくるのだといふことである。しかもそういう裏づけがあつてこそ、現在十九種類もの、雑多な作物を作つてゐる否作らざるを得ないいるものが、栽培作物を単純化することもでき、はじめて農業技術の発展も期待できる。

つまりそういう理由から、私は僅か一年有半という期間ではあつたが、この地帯の一町村で酪農指導に挺身し、クロバーや栽培を中心にして、それに馬鈴薯、デントコーン、ライ麦、並にカブの栽培をとりいれた新しい輪作様式をうちたて、その上に確固たる酪農を確立しようとしたのである。

私の考えたこの新しい輪作様式は、間違がなかつたと見えて予期以上の普及をみた。は、夏の青草期に澱粉価が不足し、乳牛の栄養価が低下してくることである。そこで私はそれを防止するために馬鈴薯栽培をすめ、それを原料に使い、晚秋にサイロを使つてイモヌカ飼料を作ることを計画したのである。

こうして岩手県のチベット地帯にすら、

◆表紙写真 牧草の刈取（チモシー、赤クロバー、ルーサン、プローモグラスの混播、二年目）

◆岩手県の高冷地帯を敷つたクロバー栽培

◆酪農十年の歩み

◆養豚における草の利用

◆我が国の酪農情勢

◆新しく果樹を植えた人たちのために

◆りんごの早生種並びに核果類に対する影響

◆北海早生と千両梨の由来について

◆ホウレン草の栽培試験成績

◆農芸談話室

十一月号 目次